

幕末明治の写真師列伝 第六十九回 内田九一 その三十四

平成 18 年 (2006)、写真業界はデジタル化の大波をもろに受けて、カメラ機材、フィルムメーカーを中心に業界激変の真っ只中になった。このため昌彦は内田写真もこの激変に対応できる体制にと、取扱商品のフルデジタル制作体制構築の推進を行う。平成 22 年 (2010) 6 月、ついに内田写真の全出先スタジオの完全デジタル化が完了する。平成 23 年 (2011)、この年、内田写真は初代、内田西之助から創業 140 年となり、『百四十年のあゆみ 内田写真株式会社 創業一四〇年』を刊行する。そして、翌平成 24 年 (2012) 1 月 25 日早朝、内田写真会長、内田弘男は享年 86 歳で亡くなった。弘男の墓は大阪内田家の菩提寺藤井寺にある。

こうして内田九一の写真術の系統は、内田西之助から内田敬一、内田虎二の二人に伝授され、その後も内田虎二から内田邦三、内田弘男、内田昌彦と引き継がれて、平成の現在まで内田写真株式会社として連綿と続いている。以下、補足として内田九一に関する新聞記事の情報をもう一度、ここでまとめておくこととする。

まず、『明治壬申七月 映中新聞 第一號』原文は、以下になる。「四月十二三日ノ頃與住巨川ト云フモノ巨摩郡高砂村ノ人東京滞留中親族ノ需メニヨリテ写真ノ為メ浅草瓦町内田九一ヲ尋子タルニ其日ハ皇上御写真ニ付亭主不在ノ由ニテ家内ノモノ引合ケレハ云々ノ事ニテ来タル由ヲ演ベテ扱皇ノ御写真ノ事ヲ問フニ各国帝王ノ写真皆々売物ニ出ル間吾ガ皇上ノ御写真モ皇国ハ勿論外国ヘモ頒布相成ル事也ト答ケレバ皇上ノ御写真ヲ数十枚頼ミ置テ帰タシトゾ同氏曰今ノ世ニモ僻遠ノ地ニテハ龍顔ヲ拝シ奉シ事ハ最モ難キワザナレバ右御写真ヲ以テ吾モ祭リ有志ノ者ノ神棚ニモ齋ヒ祭ラセントテ詔ヘタル也然レドモ謹テ其人ヲ選ビ附與スベキ事ナリト云々」

次に内田九一の横浜馬車道の写真館については、『官許横浜毎日新聞』(第 1422 号~1430 号、明治 8 年 (1875) 8 月 24 日から 9 月 3 日 (8 月 29 日は休刊)) の以下の広告がある。「今般開業仕候内田九一製造寫眞圖ノ儀者日本国中名所風景並高名人物芸妓役者其外数多新絵澤山ニ御座候間遊覽ノ上御用向仰付被下候様偏ニ奉願上候 寫眞圖売捌所 横浜馬車通常磬町七十四番地 内田」

内田九一の死亡に関する新聞記事としては、『東京日日新聞』明治 8 年 (1875) 2 月 18 日付、「寫眞師内田九一歿す」新聞記事と『読売新聞』明治 8 年 (1875) 2 月 19 日付朝刊一面、新聞記事の二つの記事があり、それぞれ以下のように記されている。「雑報 ○有名なる寫眞師内田九一氏は、昨十七日の暁きに病死したり、行年三十二。明十九日王子堀の内村郷戸松本順君の抱え屋敷内の墓地に埋葬する積りの由なり。此九一氏は長崎の出生にて、幼くして父母に離れ、伯父吉雄圭齋と云ふ医者の手で養われて人と成り、弱冠の頃より寫眞の道に志ざし、維新以来は追々

と繁昌し、遂に主上の電影をも其手にて写し奉り、其業に工なる、遍ねく人の知る所なり。その人と為りや廉直洒落の性質にて、交わるには信切を旨とし、世間同業の寫眞師にも力を添へ、助けを成したる事少なからず。数年来肺病に罹りて、吐血する既に四五度に及び、昨冬このかたは愈々肺病と成りたり。己れも兼て其早世すべきを悟り、門人中にて技術に工なるもの二人を選みて、其業を嗣がしむる策を定めれば、宮内省の御用を初めとし、一切の事も九一氏の病中も更に差支なし。故に此後とても此二人にて、先師の名を落さぬ様に繁昌するに疑ひなし。併し九一氏ほどの勉強して、一家を建て一業を開きさる人を、壮年にて死なしめしは、惜むべきの至りなり。」

『読売新聞』明治 8 年 (1875) 2 月 19 日付朝刊一面、新聞記事は、以下のような簡単な記事内容となっている。「○寫眞師の内田九一先生は久々病氣にて今月十七日に死なれました」

明治 13 年 (1880) 4 月 23 日付『いろは新聞』の「寫眞師内田九一の後家乱行の事」という記事は、以下の内容になる。「思ひ出しては寫眞を眺め、なぜか撮影 (しゃしん) は物いはぬ、實やけふは何月何日、末世盛りに相果し亡夫九一が命日、暮行月日も七年餘り、弔ふ後家と内田の門人、回向正眞紙採を、高橋 (由一) さんの油絵に、豫て頼みはせぬ者を、魂ひ込むる寫眞の手練、名誉の餘功もあるならば、孀婦 (ごけ) よくたつたと一言の、お声が聞たい聞たいと、撮影の前で口説でも、十萬億土と娑婆の隔絶、開化の御世に貞節はないと、自由の権を振廻す、女天下の則天皇皇后、豊臣の淀君、近くは木戸口の開放し、食客の優書生を閨門へ引入れて、「翠」帳「紅」閨にお巫山戯なさる、院 (浮雲い) 淫乱後室の鬢に倣ふ、浅草代地の西洋家屋、コロジオンの匂ひを麝香で消す後室どの、本夫は先年うた形の泡と消た、其後に門人がお伽の交代、押勝龍衰へて道鏡盛んなり、夫さへ残らず喰飽きて、近頃出入の女義太夫竹本綱春の媒酌で、昨今空米相場営業停止不服に付、既に上告にも及ぶべき發議人、高橋お伝に關係の穴倉佐七郎が子分と聞へし、蛸殻町の米商島田慶助といふ強尻と、いつの間にやら「出来」合て、今はふたりが仲買も、「引」にひかれぬ「本場」の「昂低」、傍の「停止」も聞かばこそ、後家は島慶を追々「貝占」、子息の總一が家に居ては思ふ様には快樂まれずと、此頃勤めて大坂にお下し、その後は誰憚らず二階住居、彼慶的を昼夜引入れ、硝子を焼かぬ日はあれど、お顔見ぬ日はないはいなど、折節綱春が取巻で、川長あたりへ解けるので、後家帳株張の門人達がボヤ付、春氣の浮和浮和話しは五圓が有つたら又此頃、併し後家さんはツキが悪いから、罰が當らなければよいがネー看客 (みなさん)。」

(森重和雄)